

【プログラムの構成】前半が外務省付属の大学院 SIR での授業とテヘラン視察、後半がイスファハーン、カーシャーン、コム の 3 都市視察というものでした。

【SIR について】SIR は、4 つの学科から成っています。基本は 2 年間の MA のコースで、卒業したらそのまま試験を受けて、受ければ外務省で働きます。数年前までは SIR に入学したら、だれでも外務省で働くことができたそうですが、ここ最近試験制度が設けられるようになり、そうはいかなくなったということです。また、SIR 卒業後、別の大学院で学問を続ける学生もいます。

SIR にいる学生で、学部時代の専攻で多かったのは、英語専攻でした。英語の文学などを学んでいたそうです。ところで、イランでは英語教育が大変盛んで、一般道路でも「IELTS」の看板を見かけることがありました。小さいころから英語家庭教師を雇う家庭もあるそうで、英語教育への熱心さがうかがえます。ちなみに、コムで見学した神学校でも英語またはアラビア語のコースが選べるということです。



【講義で】私たちは、外交政策をはじめ、核や経済など 5 つの講義を受けました。形式は、各先生が前半講義をし、後半私たちが質問するというスタイルです。（ちなみに、今回の最初のあいさつで、学部長が注目すべ

きとした話題は①JCPOA②パレスチナ③地震の 3 点でした。）特に外交政策の授業では、イランが外交において対話を大切にしているということを改めて認識しました。

【イランの寛容さ】個人的に興味があったテーマは、イスラエルやユダヤ人との関係です。イランは、イスラエルを敵として位置付けていますが、国内でユダヤ教徒は保護されています。それはどのような認識なのか。質問の仕方を変えていろいろな授業で聞いてみました。わかったのは、全体としては、ユダヤの友人は普通にいるし、ユダヤの人を嫌うということはないということです。彼らが敵としているのは、イスラエルの国というよりも、シオニストの存在です。

また、イラン外務省で大使の話を聞いたとき、2500 年前に異民族、異教徒に対して市民権が世界で初めて付与されたという歴史の話もありました。昔から、ペルシアは異民族に対して寛容です。例えば、ユダヤ教徒をバビロン捕囚から解放したのはペルシアのキュロス 2 世でした。このように歴史的に寛容な態度をとってきたイランは今

でも、民族、宗教に対して排他的な態度はとっていないというイランの誇りがそこにはありました。



【文学を大切にする心】また、スピーチの際など、詩が引用されたりするところから、イラン人の感性の豊かさを感じました。これが、私が専攻している南アジアのイスラーム文化にも現在まで大きな影響を及ぼしてきたと再認識しました。友達になった一人も、寮で每晚ルームメートが詩を詠んでくれる、という話をしてくれました。文学に親しみ、大切にしている姿は、本当に素晴らしいところだと思いました。

【治安】イランは思っている以上に安全な国でした。女性1人で道を歩いている姿もよく目撃しましたし、夜でも外を散歩している家族連れに遭遇することもありました。実際、イランの人々は、イランが中東で一番安全な国だと口々に言っていました。

【経済関係】経済交流については、イランは日本との関係を強めていきたいという話がでました。イランが日本に求めるものは、モノではなく、技術やスキルだということです。他方、イランからは、石油、ガスなどの天然資源を、ということでした。ところで様々な機械製品を目にする機会がありましたが、現状では日本のメーカーはあまり目立たなかった気がします。アメリカ寄りの姿勢をとっている日本は、アメリカのやり方に影響されている現状があり、それが日本・イランの経済関係を妨げています。日本が過度にアメリカ依存の姿勢をとっていることは、イランだけでなく、東南アジアの国からも指摘されることです。日本は、一国で十分経済大国であるし、スキルもある、もう少し独立して他国と関係を作っていくべきではないか、という話です。重要な日米関係と他国との関係のバランスをどうとるべきか、ここでまた改めて考えさせられました。

